

博士論文要旨

戦時中インドネシアに派遣された日本女性作家文学論

—林芙美子を中心に

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士後期課程

フィトリアナ プスピタ デウィ

Fitriana Puspita Dewi

本論文は、一九四二年から一九四四年にかけて、陸軍報道部による「南方視察」使命でインドネシアに派遣された日本女性作家の文学作品を対象とし、インドネシアの諸地域を旅した経験を持つ林芙美子、小山いと子、佐多稲子の作品を考察したものである。作品を通して、ジェンダーと植民地主義との関連性、インドネシアでの体験における二面性、作家たちのインドネシア観を析出する。

第一部は林芙美子を中心に、ボルネオ、ジャワ、スマトラというインドネシアの三つの地域に基づいた戦中から戦後の作品を考察し、第二部は林芙美子と共にインドネシアの行かされた小山いと子と佐多稲子の作品の分析である。

第一部第一章は戦時中で林芙美子が執筆した紀行文を対象とし、インドネシア各地域における地方の特色、当地における作家の戦争協力の形、及び当地における軍政の方針を検討し、作家のインドネシア観を把握しつつ、林芙美子の文学に戦中と戦後の連続性／非連続性を論じている。

第二章から第四章にかけては、林芙美子が戦後に執筆した作品に注目している。第二章は「古い風新し風」を取り上げて、ボルネオを軸に戦前から戦後に至るまでの様々な転換点を考察した。作品は「想像されたボルネオ」、「現実のボルネオ」、「思い出のボルネオ」という時間軸に分析を行い、作家に英国作家アグネス・キース『風下の国』の受容性を入れつつ、作家の南方出発前の意識とその変動を明らかにしている。

第三章は再びボルネオを舞台とした「ボルネオダイヤ」を対象とし、南ボルネオのダイヤモンド鉱業で採掘された一粒のダイヤモンドを軸にボルネオにおける日本植民地の多面的な現実を論じている。

第四章は「荒野の虹」を対象に、戦後スマトラから帰還した復員兵の自己喪失から自己発見までの過程を考察した。

第二部の第一章は小山いと子の『椰子真珠』を対象に、戦時中スマトラの多言語状況における旧帝国語と新帝国語の微妙な戦争を考察する。スマトラの多様な社会階層内における言語ヒエラルキーにおいて「言語植民地」と「言語ヘゲモニー」という二つ日本語普及の戦略を論じている。

第二章は佐多稲子の「挿話」を対象に、スマトラ農園のサウンドスケープ（音風景）による主人公の心理の変化を考察する。作中で登場される「音」によって作家はスマトラを捉えつつ、作家の支配者としての優越性と異国に対する不安という二面性を暗示している。

最後に終章ではそれまでの論述したふまえをうえて、日本帝国主義における女性作家の位置づけとその交渉についてまとめている。